

第35回鳥学講座

最新恐竜学 @JBF

講師：真鍋 真（国立科学博物館・群馬県立自然史博物館）

人類が学術的に恐竜の存在に気がついたのは1824年にイギリスでメガロサウルス、1825年にイグアノドンが命名されたところ、今からちょうど200年ほど前のことでした。この間、2677以上の恐竜の学名が提唱され、そのうちの1383種が有効な学名だと考えられています(2024年12月現在)。恐竜の研究はその形態的な多様性はもちろんですが、その進化や生態にも次々と新しい知見が得られるようになっていきます。

始祖鳥が爬虫類と鳥類の中間の化石と位置付けられたのは1868年の「種の起源」の改訂版でした。その後、爬虫類と鳥類の近縁性は一度は否定されましたが、1970年代に鳥類の恐竜起源説が復活しました。同説が広く知られるようになったのには、マイケル・クライトンの小説「ジュラシックパーク」、さらにはその映画化がありました。恐竜と鳥類の近縁性がさらに説得力をもつようになったのは、1996年に始まった「羽毛恐竜」の発見、2003年には恐竜の段階で翼が出現していたこと、2010年には色や模様などが次々と明らかになりました。そのつながりは形態だけでなく、抱卵などの生態や行動などでも進み、恐竜は化石としてだけではなく、生物学的に研究する対象となりました。現在では、どこまでが恐竜で、どこからが鳥類かその境界線が引けないくらい連続的な進化があったことが明らかになっています。

講演会ではたくさんの質問をいただきます。少し前から「私が夢を叶えて恐竜研究者になった時に、やる残っているのでしょうか？」という質問を受けるようになりました。小学生の男の子から多い質問です。新しい恐竜化石の発見や新しい研究のニュースに数多く接すると、もう大抵のことはわかってしまっていると思うかもしれませんが。私たちは世界中の研究者による新しい研究成果を解説することで、ここまでわかってきたという驚きを解説することが多くあります。この数週間の間でも、世界最古の鎧竜や堅頭竜の発見の論文、鳥類への進化における恐竜の血液中の赤血球のサイズの変化などの研究が次々と発表されています。先ほどのような質問をする子どもたちには「心配しなくていいよ。三畳紀、ジュラ紀、白亜紀の1億6000年以上にわたって繁栄していた恐竜は数十万種いたはず。1300種なんてまだまだ氷山の一角だよ」と伝えるようにしています。私も最新の成果だけでなく、その先にある「まだわかっていないこと」、「わかってほしいこと」などについてもお話するようにしています。

私が前回、ジャパンバードフェスティバル(JBF)でお話したのは2015年でした。それから10年で私たち人類の恐竜と恐竜の進化に関する理解に関して、何がどこまで進歩したのか、振り返ってみたいと思います。一緒に恐竜学の現在を確認し、近未来を俯瞰してみませんか？



真鍋先生とティラノサウルスの復元骨格（撮影：田中健一）

講師プロフィール

真鍋 真（まなべ・まこと）：国立科学博物館・名誉研究員、群馬県立自然史博物館・特別館長。横浜国立大学教育学部卒業、米イエール大学大学院MSc課程修了、英ブリストル大学大学院PhD課程修了。PhD。1994年から2025年3月まで国立科学博物館に勤務し、副館長、研究調整役などをつとめた。恐竜や古生物の図鑑、絵本、著書など多数。中生代の化石から爬虫類や鳥類の進化を明らかにしようと、日々、物言わぬ化石に心の中で語りかけている。

日時：2025年11月1日（土） 13：30～15：00

会場：我孫子市生涯学習センター アビスタ 1F ホール（千葉県我孫子市若松26-4）12：00から会場にて整理券配布

主催：我孫子市鳥の博物館・（公財）山階鳥類研究所